

# 浅利 康衛（あさり・こうえい）

## 1、プロフィール

昭和 23 年「暖鳥」入会。「萬緑」「小熊座」を経て、平成 10 年 9 月に俳誌「まほろば」を創刊。編集発行人として現在に至る。平成 26 年に青森市文化功労賞を受賞。

### <生没>

1932(昭和 7)年 3 月 10 日 ~ 2023(令和 5)年 2 月 23 日

### <代表作>

防波堤凍る真白、多喜二、多喜二  
虻容れし花の微動や日は暈に  
真闇よりわが粉骨の夜光虫  
天心をぎいと廻して大犬座  
老妻の咀嚼しづかに桐の花

### <青森との関わり>

青森市に生まれ育つ。上北郡の小学校に勤務した後、青森市に転勤。青森市俳句連盟の事務局長を務めた。

## 2、作家解説

青森市生まれ。1948(昭和 23)年「暖鳥」に入会。5月号で<青天の四角に続く田を植うる><春泥をつけ看板工の靴大き>の句が千葉菁実によって選ばれ、いきなり巻頭に掲載された。当時、16 歳。県庁の臨時職員として勤務しながら定時制で学んでいる時代であった。1952(昭和 27)年7月号では<多喜二忌や人踏む雪は幾重の層><防波堤凍る真白、多喜二、多喜二>を詠み、再び巻頭に掲載される。千葉菁実は「原稿をわしづかみに巷へととび出したという感じである。はだして、

大声で多喜二、多喜二！と叫んでいる。そのかなしさ」と評した。その後、上京して大学に学ぶ。中央大学第2文学部文学科仏文専攻、2年退学。帰郷して教師になり、上北郡の小学校に勤務。8年間俳句から遠ざかっていたが、七戸俳句会に入り復活。「萬緑」同人の米田一穂に師事。七戸町には「暖鳥」同人の下田魚目があり、赴任と同時に役員を申しつけられた。七戸町で初めて県下俳句大会を開催するかたわら、教員として地域活動にも出色の力を発揮した。七戸俳句会時代約10年。その後青森市へ転勤。

俳句団体役員としては、「暖鳥」、七戸俳句会、上北郡俳句連盟、青森市俳句連盟、青森県俳句懇話会等でそれぞれ活躍。青森県俳句懇話会事務局次長の時「青森県俳句碑しらべ」を提案し1996(平成8)年5月に発行。また、1993(平成5)年、青森市俳句連盟事務局長の時「青森市小中学校俳句コンクール」を組織し、25年間連続で実施した。

1998(平成10)年9月に俳誌「まほろば」を創刊。編集発行人を担った。同年には「文芸あおもり」第145号に掲載された成田千空との対談で一躍脚光を浴び、県俳壇における論客ぶりを発揮した。2014(平成26)年9月、青森市文化功労賞を受賞。句集には『溶明』(昭和57年8月31日発行、佐藤印刷株式会社)と『夜光虫』(平成27年7月10日発行、東奥日報社)の2冊がある。